

都市フォーラム 17 号

東北都市学会通信（通巻 17 号）

2007 年 3 月 24 日

目 次

- ・新会長あいさつ
- ・東北都市学会 2006 年度大会を開催
- ・2006 年度会員会を開催
- ・新役員が決まる
- ・研究例会 COLLOQUE(16)を開催
- ・2006 年度第 2 回理事会の開催
- ・日本都市学会第 53 回大会が開催
- ・日本都市学会会長に佐々木公明会員が選ばれる
- ・研究年報発行の遅れと原稿募集について
- ・『仙台都市研究』の発行と編集
- ・出版物等の寄贈のお願い
- ・【2005 年度東北都市学会決算報告】
- ・【2006 年度東北都市学会予算】
- ・会員の入退会
- ・2006 年度会費納入のお願い
- ・事務局から

新会長あいさつ

会長就任に当たっての所感

佐々木公明先生が昨年 9 月に実施された日本都市学会の会長選出において 2007-08 年度の会長に推薦され、10 月 27 日開催の総会で承認された。日本都市学会会長は慣例として地域学会長を兼務しないことから、東北都市学会長を一期で辞退されることになった。我々には、日本都市学会が佐々木先生のリーダーシップの下で新たな方向性を見出し、活性化することを期待する面と、東北都市学会の運営面での不安を覚える面とが入り混じるところがあった。佐々木先生ご自身、その点を十分に承知されていた。しかし、日本都市学会が佐々木先生を求められている以上、東北都市学会としては日本都市学会での先生の活動を支援する道しかないことは自明のことであった。

そんな経緯から東北都市学会では後任会長の人選が必要となり、私にその任が回ってきた。私はこれまで学会活動の持続を望み、主に研究集会の仕事を担当してきた。それはすでに敷かれたレールの上での活動であり、学会のさらなる発展を構想するようなことはなかった。それだけに、佐々木先生の後任会長として私の名前が挙がったときには、不安が先に立った。しかし、佐々木先生が日本都市学会長を引き受けられたこ

とにダブらせて、私も後ずさりすることなく努力しなければならないと自覚した次第である。

周知のことかもしれないが、現在の東北都市学会は 1998 年に吉原直樹元会長と佐藤直由先生とが中心となって新たに賛同者を募り、1989 年以来活動を停止していた学会を再建したものであった。同年 10 月 3 日（土）、斉藤報恩会館を会場にして再建設立大会と公開シンポジウム「21 世紀の東北都市を考える」が開催された。新しい東北都市学会に期待する参加者の熱気が漂っていたことを記憶している。

私は、再建に向けての呼びかけにあった次の一文に強く共感を覚えた。「都市をフィールドとする研究者のみならず、都市の存続と再生に深くかかわっている諸主体、諸組織が加わることによってフォーラムがたえず活性化されることがもとめられています。社会と積極的にコミュニケーションする能力を身につけることが、東北都市学会の再生にとって鍵になるといえます。」

とくにフォーラムという言葉は、広い世界との交流を期待しながらも結果として専門領域に閉じこもりがちであった私には大変魅力的であった。この点は恐らく再建大会に東北地方各地から駆けつけた人たちに共通するところであったように思う。再建後の学会は、この趣旨をよく踏まえて活動を実践してきたと認識している。常にオープンな学会として、大会でのシンポジウムおよび研究例会（Colloque）はともに公開で開催されてきた。また、再建学会の大きな成果である『東北都市事典』の編纂は研究者のみならず多くの市民の協力を得て出来上がった。執筆者数は 130 名に及んだ。

しかし、再建学会もすでに 10 年の歳月を経るなかで、会員の異動および学会を取巻く環境が変化し、「フォーラムの活性化」を図る必要性に迫られているように思う。上記した呼びかけ文にすでに「フォーラムがたえず活性化されることがもとめられています。」とある。都市の存続と再生に関心を寄せる人たちをさらに募り、活気あるフォーラムを再生産する努力が求められていると言ってよい。そのためには、会員間の意見交流をこれまで以上に活発にし、会員の参加意識を高められるような仕組みが必要かと思っている。東北都市学会の会員は東北地方各地におられ、そのお陰で年次大会が東北 6 県を順に回る形で開催されている。この利点を活かして、東北地方各地で小規模なフォーラ

ムであっても東北都市学会のフォーラムとして企画・開催し、それを会員に通知することができれば、今以上に学会の活動が日常的になり、会員のネットワークも広がるように思う。

そんな訳で、この場をお借りして、会員の皆さんに、学会の活性化に向けたアイデアを寄せて頂くようお願い申し上げます。

日野正輝

東北都市学会 2006 年度大会を開催

2006 年度大会は、2006 年 11 月 18 日（土）・19 日（日）の両日にわたり、秋田県大館市の秋田看護福祉大学を会場に開催されました。第 1 日目は、公開シンポジウム、懇親会が行われ、第 2 日目は、研究発表が行われました。本大会は、秋田看護福祉大学地域総合研究所（団体会員）の石川雅典氏のご尽力ならびに秋田看護福祉大学、大館市役所のご協力の下に開催されました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。以下に石川雅典会員による大会開催報告を掲載いたします。

\$

東北都市学会 2006 年度大会（公開シンポジウム） 開催報告

石川雅典

東北都市学会の 2006 年度年次大会（通算 8 回）が 2006 年 11 月 18 日（土）～19 日（日）にかけて本学会を会場として開催された。

本学会は、都市に関心を有する人々のフォーラムとして社会と積極的にコミュニケーションし、都市研究・都市政策・都市計画の新たな地平を切り開くことを目標に活動している。これまでも、仙台をはじめ東北各地の中規模都市で開催されてきた年次大会等に合わせ、各地の事情やトピックにみあった公開シンポジウムを開催してきた。年次大会は、これまで概ね東北各県年に 1 回ずつの持ち回りで慣行的に開催され、2006 年度は秋田県において開催されることが理事会決定されていた。

県内の開催地選定にあたっては東北都市学会会長と秋田県在住理事との間で協議が重ねられ、大会における準備・運営等との関係から大館が開催候補地として決定された。引き続き、仙台を拠点とする学会の企画・集会専門委員会と開催地運営担当者との間で、公開シンポジウム開催の方向とテーマの検討が始められ、「地域活性化」をキーワードとして、パネリストの発掘とテーマの絞り込みとを双方で試みることになった。開催地側では、大館市役所や市内のまちづくり団体等に働きかけを行い、公開シンポジウム開催に向けた協力の依頼とテーマに対する要望の把握、そしてパネリストとして適任な方に対する協力依頼を行った。これら

の準備状況を仙台と開催地とで相互に連絡・調整しながら、①公開シンポジウムのテーマを「地域再生と魅力の創出」とすること、②パネリストとして開催地から 2 名、秋田県内から 1 名、仙台近郊から 2 名の計 5 名とする企画が固まった。その後、学会事務局との事務的な連絡協議を経て開催場所を本学とすることが正式決定された。

大会は、初日の 18 日が公開シンポジウム、2 日目の 19 日が研究発表で構成されていた（文末の資料 1 および資料 2 参照）。本稿では、一般参加者と学会会員あわせて約 70 名が参集した公開シンポジウムの様子を中心に報告をしたい⁽¹⁾。

公開シンポジウムは、東北都市学会主催、大館市・（社）大館青年会議所・秋田看護福祉大学共催、大館まちづくり協議会後援のもと、基調講演とパネルディスカッションの順ですすめられた。講演に先立って、東北都市学会の佐々木公明氏（東北大学大学院教授）が「地域再生と一緒に考えていきたい」と挨拶し、続いて開催地を代表して、当日のパネリストでもある小畑元大館市長が歓迎の言葉を述べられた。

基調講演は、民俗研究家として著名な結城登美雄氏が「地域の個性と多様性を生かしたまちづくり」について約 1 時間語られた。当日配布された資料の中で、結城氏は基調講演に向けて次のようなメッセージを用意していた。

「豊かさを求めて農山漁村から次々に人々が流出していった向都離村の昭和 40 年代。人影が消え荒れていく農地と山林。そんな風景と都市へと急ぐ村人の後姿を見送りながら、旅する民俗学者、宮本常一はこうつぶやいた。《自然はさびしい。しかし、人の手が加わると暖くなる》と。自然ばかりではあるまい。地域が本来もっていた個性や多様性もまた「さびしい」のではないだろうか。経済の後退、行財政の悪化など、地域をとりまく条件は厳しいけれども、そこに多くの人の手が加わることで暖かいものにすることはできないだろうか。私が少しく関わった東北の小さな農山漁村の試みから、地域再生の手がかりを探ってみたい。」

結城氏は農山漁村における豊富なフィールドワークの経験をもとに、地域とは家族の集まりであり、その集まりが稀薄化し行政頼みになっている現実を見つめ、今の時代は誰が何をどのように再生していこうとすることが重要なテーマであるとし、一人ひとりが「つくる力」を取り戻していくことを力説された。あわせて、全国各地におけるお年寄りへのインタビューをもとに、「おじいちゃんとおばあちゃんはどんな風になったらいい村になると考えていると思うか」と来場者に問いかけ、「まずは仕事場、そして居住環境、地域文化、学びの場、ええ仲間、ええ自然風土、ええ役場」などを

条件として順番に取り上げ、「100 点をとれるところはない。この中にその地域の個性が見える」とまとめた。そして、地域とは農村・都市社会学者鈴木榮太郎がいう自然村が基本であることや、農地があることの豊かさ、食べ物を自給できる地域づくり、安心して生きていくことができる地域再生の方向性を提唱された。

続くパネルディスカッションは、日野正輝・東北都市学会研究活動担当理事のコーディネイトのもと 5 名のパネリストが参加してすすめられた。初めに、テーマ検討の経緯などを踏まえて筆者が次のような趣旨説明を行った。少し長くなるが、地方小都市である大館で当該シンポジウムを開催する意義にも触れているのでここに紹介する。

「地方都市の再生や内発的発展が各地で話題となっていますが、多くの地方都市では新自由主義的な潮流のもと、人口減少が進行し、地域経済が停滞しています。また、大都市との地域間格差も広がりつつあります。そしてその内部では、地方都市の生活・文化問題としてより切実な中心市街地空洞化や市町村合併による地域再編成や地域内分権が大きな課題として横たわり続けています。

その一方で、背後に広がる農山漁村を抱えた地方小都市は、日本全体からみれば周辺に位置づけられながらも、歴史的に地域の中心的存在であり、文化的拠点であり、今なおその役割をもち続けているといえます。ことに地理的に独立した都市ほどその性格は強いと考えられます。さらに、多くの課題と限界を抱えながらも、異質性が高い大都市とは異なり、小規模ゆえの可能性を秘めているともいえます。

本日地元からご参集下さった皆さまには申し上げるまでもございませんが、今開催地である大館は、終戦後までは基本的に農業と木材を中心とする第一次産業の町として、そして高度成長期は黒鉱ブームで鉱山が活況を呈し、現在はリサイクル産業など新たな町へと展開しています。また、ある研究によりますと、商業特性の町という分析もなされています。ハチ公やきりたんぽを始め、多様な地域資源に恵まれ、多様さの中に個性が見え隠する状況ともみられます。1990 年代半ばまではこの大学や大館樹海ドームなど大きなプロジェクトによって地域は活気を帯びていました。ただ、その後は時代の流れの影響を避けることができず、中心市街地空洞化をはじめとする地域課題は根が深く、町全体の趨勢や住民生活にも直接関わってきています。ここに今の段階における地域活性化を探るひとつの理由があると思います。

テーマにあります地域再生は、地域再生法という法律が成立したこともあってトピカルな用語です。また、大館市にとっては地域再生が重要施策のひとつとなっております。ただし、今回のテーマ設定にあつてはもう少し広い意味の地域再生、つまり変質しつつある地域社会においてより豊かで安全でより快適な、そしてより幅のある安定した生活を築くという意味を含めています。そして、まちづくりが地域の再生と創造という意味

であるとしめすと、この地域再生が活性化の大きなポイントになってくるともいえます。そして、地域再生の過程と結果において、町の魅力は増幅すると考えます。」

独自の歴史と文化、資源を有した地方小都市にとって、ではどのような地域再生の方法があり、既存の制度との関係で何をきっかけとしてどのように取り組めばいいのでしょうか。本日は、このような観点から地域活性化のあり方を改めて問う契機にしたいと思います。」

趣旨説明に続いて各パネリストによる提言が行われ、①小畑元市長は、大館の地域再生は旧合併町村である 17 のコミュニティへの着眼がポイントである点や、市内十二所地区の名称の由来をもとに、各地域で目標や特徴・ストーリーを持つことの大切さ、地域に即して守るものを守りながら判断することの重要性を強調された。あわせて市長は「地域というのはブドウの房のようなもの」との考え方を述べられている。②大館青年会議所理事長の佐藤利輝氏は、青少年を対象とした野球教室などの次世代育成事業や、ハチ公を縁とした渋谷区との交流・連携事業、そして地域貢献事業に関する豊富な青年会議所活動の経験をもとに、会議所メンバーを含めた元気な人づくりと元気な人が集う地域になることが私たちの活動目標であると熱弁をふるわれた。③多彩な事業活動を展開しているたざわこ芸術村の(株) わらび座営業部長小島えみ子氏は、地域に伝わるものを題材としたミュージカルに取り組んでいることを紹介しながら、それぞれの地域の魅力をネットワーク化することが地域再生の鍵と提案された。また、地域の発見が人間の発見、そして自分の発見にもなると述べられた。④結城氏は、基調講演の内容を引き継ぎながら、次世代の人たちが自分の住んでいる場所において生き甲斐のもてる仕事に就けるようにしたい、と現代社会が根底で抱える課題に対してすこぶる刺激的な問いを發した。⑤最後に東北学院大学教授の岩動志乃夫氏は、パワーポイントで秋田市をはじめ日本各地の都市形成や都市景観の映像を紹介しながら、中心市街地活性化を左右するのは都市の整備にどれだけ時間をかけて行ってきたかではないか、と指摘した。大館市自体が今後、改めて中心市街地活性化計画を策定していくこともあり、ホットな報告内容であった。

後半ではフロアからパネリストに対する質問や意見が募られ、活発な質疑が交わされた。そして最後にコーディネイターがパネリストの提言やアイディア、フロアとのやりとりを総括し、「本日のシンポに参加された方々は、地域再生について新しい考え方を学ばれたと思います」と 3 時間近くに及んだパネルディスカッションを締めくくった。

そもそも地域の概念は多義的・操作的であるとともに

2005年度 東北都市学会 決算報告

貸借対照表(2006年3月31日現在) 単位:円

科目	金額	科目	金額
現金	20,455	次年度繰越	580,999
郵便貯金	130,891		
銀行預金	224,053		
合計	580,999	合計	580,999

収支計算書(自2005年4月1日 至2006年3月31日)

収入の部

単位:円

科目	予算額	決算額	増減	摘要
1 前年度繰越金	267,722	354,300	-86,578	
2 会費収入	1,488,000	1,460,000	28,000	団体9、一般個人、一般学生、地域個人、地域学生→104
3 利息	10	11	-1	
4 広告収入	10,000	0	10,000	
5 年報代収入	5,000	9,600	-4,600	
6 大会参加費	30,000	0	30,000	
7 臨時的収入	0	372,736	-372,736	日本都市学会大会関連収入
合計	1,800,732	2,196,647	-395,915	

支出の部

単位:円

科目	予算額	決算額	増減	摘要
1 印刷費	530,000	26,800	232,275	200部 No.15
封筒	50,000	14,000	36,000	
学会通信	100,000	12,800	87,200	
研究年報	350,000	0	350,000	
発表要旨集	30,000	0	30,000	
2 郵送費	150,000	45,130	104,870	切手代44,920、メール便・宅急便210
3 事務雑費	10,000	58,640	-48,640	事務用品3,660、事務アルバイト54,000、支払手数料980など
4 旅費	200,000	7,160	192,840	公開フォーラム旅費、(理事会出席旅費未払い)
5 会議費	10,000	0	10,000	
6 委託費	100,000	0	100,000	
7 研究活動費	100,000	83,998	16,002	colloqueなど
8 大会運営費	50,000	457,920	-407,920	日本都市学会大会諸経費
9 負担金	150,000	100,000	50,000	国際シンポジウム報告書負担金
10 日本都市学会会費	360,000	712,000	352,000	2004年度分360,000、2005年度分352,000
11 日本都市学会編集委員会債務	0	124,000	124,000	担当事務の立替経費(2006年に補填される)
12 次年度繰越金	140,732	580,999	-440,267	
合計	1,800,732	2,196,647	-395,915	

2006年度 東北都市学会 予算案

収入の部

単位:円

科目	予算額	昨年度実績	摘要
1 前年度繰越金	580,999	354,300	
2 会費収入	904,000	1,460,000	団体8、一般91、地域33
3 利息	10	11	
4 広告収入	5,000	0	
5 年報代収入	5,000	9,600	
6 大会参加費	30,000	0	1000円×30人
7 臨時的収入	324,000	372,736	2005年度分124,000円、2006年度分200,000円
合計	1,849,009	2,196,647	

支出の部

単位:円

科目	予算額	昨年度実績	摘要
1 印刷費	490,000	26,800	
封筒	30,000	14,000	
学会通信	30,000	12,800	200部×3(No.16、No.17)
研究年報	300,000	0	200部(vol.7)
仙台都市研究	100,000	0	No. 5
発表要旨集	30,000	0	100部
2 郵送費	60,000	45,130	切手代、宅急便等
3 事務雑費	60,000	58,640	事務用品、支払手数料等
4 旅費	200,000	7,160	理事会等出席旅費(2005年度分、2006年度分)
5 会議費	10,000	0	会議室借り上げ
6 委託費	100,000	0	2005年度公開フォーラム、2006年度大会テーブルお越し
7 研究活動費	80,000	83,998	COLLOQUE等
8 大会運営費	100,000	457,920	2006年度大会(大館)
9 負担金	0	100,000	
10 日本都市学会会費	332,000	712,000	4,000円×83(98会員×0.85)
11 日本都市学会編集学術委員会経費	200,000	124,000	担当事務の経費
12 次年度繰越金	217,099	580,999	
合計	1,849,099	2,196,647	

* 参照

会員数(2006年11月14日現在) 小計

	81	
一般学生	10	91
地域個人	28	
地域学生	5	33
団体会員	8	8
計	132	132

理事 吉野 英岐（岩手・機関誌編集担当）
 理事 千葉 昭彦（宮城・渉外担当）
 理事 初沢 敏生（福島）
 理事 吉原 直樹（支部選出理事）
 理事 岩動志乃夫（研究活動担当）
 理事 高橋 英博（会計担当）
 理事 佐藤 信夫
 理事 佐藤 直由（庶務担当）
 理事 秋田看護福祉大学地域総合研究所
 （担当：石川雅典）
 理事 仙台市（担当：企画市民局政策企画課）
 理事 仙台都市総合研究機構（2007年3月まで）
 理事 仙台エリアマーク事業協同組合
 監事 阿見 孝雄・高橋早苗
 顧問 松本 和良・古田 義弘・古城義隆

研究例会 COLLOQUE (16) を開催

2006年10月14日(土)午後1時30分～5時に、仙台市青葉区中央市民センター第1会議室で研究例会 COLLOQUE (16) を、拡大研究例会として公開で開催しました。テーマは「まちづくりに活かすカー協働によるまちづくりを目指して」とし、以下のようなプログラムで進められました。

「まちづくりに活かすカー協働によるまちづくりを目指して」

開会挨拶 佐々木公明(東北都市学会会長)

趣旨説明 加藤 渉(NPO法人まちづくり.com 代表)

講演 山田 進(青森市都市整備部次長)

「青森市のまちづくりについてーコンパクトシティの形成と中心市街地活性化ー」

講演 阿留多伎真人(尚絅学院大学短期大学部教授)

「官民協働のまちづくりについて」

・コメント 千葉昭彦(東北学院大学経済学部教授)

・司会 日野正輝(東北大学大学院理学研究科教授)

加藤渉氏による「まちづくりに活かす力」をテーマとした趣旨説明の後、山田進氏からは青森市における中心市街地活性化の取り組みについてご報告いただきました。青森市では中心市街地の空洞化をとどめるためにコンパクトシティの形成を都市計画のマスタープランの理念としたこと。市街地の活性化のために、楽しみ(再開発ビルAUGAの立地)、交流街づくり(パサージュ広場の整備)、地元商業者、市民が一体となった活動、まちなか居住の推進などを行ったこと。こうした取り組みの効果として、歩行者通行量の増加、中心市街地地区の人口の回復が得られたことが示されました。阿留多伎真人氏からは仙台に隣接する名取市にお

けるまちづくり活動についてご報告をいただきました。「リバイブ名取21」に集約したさまざまな活動のプロセスとそれらの活動の特徴が紹介され、大きな役割を果たしたピカボード(発光ダイオードによる光のアート)の実物も持参されました。また、仙台市南部の中田青年商業練成会 SA_KAERU の活動についても紹介されました。特にワークショップによる協働のまちづくりの重要性について強調されました。報告の後は、千葉昭彦氏のコメントうけて熱心な質疑が行われました。会員のほかにまちづくりに関心をもつ多数の学生も含め41名の参加を得て、活発な研究会となりました。ご講演の両氏には厚くお礼申し上げます。

2006 年度第 2 回理事会の開催

2006年度の第2回理事会が11月19日に秋田看護福祉大学会議室で開催されました。議事は次のとおりで会員会において報告、審議することが了承されました。Ⅰ報告事項1. 2005年度事業報告 2. 2005年度決算報告。Ⅱ審議事項1. 2006年度事業計画(案)について 2. 2006年度予算(案)について 3. 役員改選 4. 次年度大会について。Ⅲその他1. 日本都市学会について 2. 会員の入会・退会 3. その他

日本都市学会第 53 回大会が開催

2006年10月27・28日の2日間にわたって、日本都市学会第53回大会が、「変革期のなかの地域戦略」をテーマに、福岡県荏田町の西日本工業大学を会場として、開催されました。10月27日午後は、吉廣荏田町長による特別講演「変革期における京築地区の方向」が行われ、続いてシンポジウムが行われました。研究発表は27日午前と28日に行われました。研究発表は58本、参加者は78名でした。

日本都市学会会長に佐々木公明会員

日本都市学会第53回大会において2007・8年度会長に本学会前会長の佐々木公明会員が総会で承認されました。新会長は日本都市学会規約に基づき理事による選挙が9月に行われ、佐々木公明会員が選出されました。これを受けて第3回理事会で会長候補として決定し、総会に諮られたことによります。佐々木公明会員にはご苦労をおかけすることになりますが、皆さんのお力添えをお願いする次第です。

研究年報の発行遅れと原稿募集について

研究年報第7号の編集が遅れており、会員の皆さま

にはご迷惑をおかけしています。申し訳ありません。
急ぎ発行を目指して調整いたします。なお、自由投稿論文は随時受け付けています。奮ってご応募下さるようお願いいたします。「論文」、「研究ノート」、「フィールドノート」、「都市情報」、「書評」、「文献紹介」すべてのジャンルで受け付けます。研究年報各号に掲載しております[研究年報投稿規程]に従って原稿を作成のうえ、東北都市学会事務局 研究年報編集委員会宛にお送りください。

出版物等の寄贈のお願い

研究年報では「書評」や「文献情報」も掲載することになっていますので、会員の皆さんが執筆された出版物を「書評」や「文献情報」という形でできるだけ取り上げていきたいと考えています。そこでお願いです。皆さんが執筆されたあるいは関わった出版物や報告書などを事務局にご寄贈ください。また、会員の執筆でなくても東北都市に関わるものとして推薦される出版物がありましたら、著者から学会にご寄贈いただけるようお取り次ぎくださるとありがたく思います。

ご寄贈いただいた出版物等は編集委員会に「書評」や「文献情報」の対象として託するとともに、「東北都市文庫」という形で蔵書化を図っていきたく考えています。よろしくをお願いいたします。

会員の入退会

[入会]

一般個人 千葉喜久也(東北福祉大学)
一般個人 西山 良孝(財団法人計量計画研究所)
一般学生 中津川勇志(東北大学大学院院生)
地域個人 工藤 薫(バスコムデザイン株式会社)

[退会]

2006年3月 地域学生 高橋 良
2006年3月 団体 (株)東日本リサーチセンター
2006年3月 団体 日本政策銀行東北支店
2007年3月 地域個人 法澤 明子
2007年3月 地域個人 森脇 良二
2007年3月 地域個人 松橋 倫久
2007年3月 団体 仙台都市総合研究機構

2006年度会費納入のお願い

2006年度の会費未納の会員は納入をお願いします。学会の活動は、会費によって支えられています。会員の皆様の迅速な納入をお願いいたします。うっかり滞納をされている会員もおられるかと思えます。納入に

ご協力ください。

なお、会費未納の会員には請求書を同封いたしましたので、郵便振替あるいは銀行振込をご利用ください。会費は次のとおりです。

一般個人会員

東北都市学会費 6,000 円 + 日本都市学会費 4,000 円 = 10,000 円

地域個人会員

東北都市学会費 6,000 円

一般学生会員

東北都市学会費 4,000 円 + 日本都市学会費 4,000 円 = 8,000 円

地域学生会員

東北都市学会費 4,000 円

団体会員

東北都市学会費 10,000 円 × 口数 + 日本都市学会費 4,000 円

納入方法

郵便振替 02250-2-42389 東北都市学会
郵便貯金口座 18140-27225001 東北都市学会
銀行口座 七十七銀行 仙台市役所支店
(普) 5253861
東北都市学会 会長 佐々木公明

事務局から

▼またまた発行が遅れ申し訳ありません。▼昨年 11 月の会員会において新役員が選出されました。日野会長のもと学会活動のより一層の活発化を図っていきたいと思います。▼4月7日(土)の研究例会第17回はエクスカッションです。仙台空港アクセス鉄道の開通と沿線開発(なとりりんくうタウン、ダイヤモンドシティ)を臨検します。多数のご参加をお待ちしています。▼会費納入案内において、会費振込先は前会長名のままとしています。加入者等の変更手続きを終えましたら改めますので、それまではこのままご記入下さるようお願いいたします。

都市フォーラム 17号	東北都市学会通信
2007年(平成19年)3月24日発行	
編集発行	東北都市学会事務局
〒981-8551 仙台市青葉区国見6-45-1	
東北文化学園大学医療福祉学部保健福祉学科	
佐藤直由研究室気付	
Tel022-233-3987	E-mail snao@hss.tbgu.ac.jp